

平成 24 年度
福岡県移住者子弟留学報告書

2012 Exchange Students Program for
Descendants of Immigrants from Fukuoka Prefecture

C o m p l e t i o n R e p o r t

Fukuoka International Exchange Foundation

財団法人福岡県国際交流センター

目次

02

平山 英子 カロリナ (ブラジル福岡県人会)

国際医療福祉大学福岡リハビリテーション学部

05

樋口 ミシェル 優一 (ブラジル福岡県人会)

専門学校九州デザイナー学院ゲームクリエイター科

08

中尾 カロリーネ きみえ (ブラジル福岡県人会)

九州産業大学国際文化学部

11

稲田 美穂 ナージャ (トメアスー福岡県人会)

九州大学医学部

14

川波 一幸 (在ボリビア福岡県人会)

福岡県農業総合試験場

17

小椋 恵子 (コロンビア福岡県人会)

折尾愛真短期大学経済学部

20

原田 ミカエラ (アルゼンチン福岡県人会)

九州大学大学院比較社会文化学府

23

田辺 グティエレス アルド (ペルー福岡クラブ)

九州大学大学院芸術工学府

26

山本 ケリー 真由美 (南加福岡県人会)

九州産業大学国際文化学部

29

立花 操 (サンフランシスコ福岡県人会)

九州大学医学部



ブラジル福岡県人会 平山 英子 カロリナ

はじめに

1年がたつのは、とても早かったです。本当に楽しい1年でした。まだまだやりたいことがたくさん残っています。私はブラジルのサンパウロ州サンパウロ市出身の日系3世です。23歳です。2011年、私はサンパウロ連邦大学（UNIFESP）の理学療法学科を卒業しました。それから日本に来るため準備を始めました。

福岡での生活

日本に着いたときは、私がかから遠く離れたことに気づいた最初の瞬間でした。その気持ちに気づいたときは、少し怖かったです。しかし、少しずつ私は日本の生活を楽しむことを学びました。日本は、たくさんの異なる顔を持っていました。

私は日本でもう一度見たい景色は、桜です。福岡に到着してから、私が見た最初の景色は、満開の桜の木でした。それは本当に美しかったです。日本の町は、花の色で変わっていきます。春の時期は、私は今まで見たことがなかったさまざまな花を見ることができました。例えば、ツツジやチューリップなどです。

また、ブラジルと日本の文化は、異なることがたくさんありました。日本の電車は遅れることがないし、時刻表もあります。運転手は、左折、右折する時は、アナウンスをしてくれるし、乗客がバスを降りる時は、いつも「ありがとうございます」と言います。そして、日本の町中には、ゴミ箱が少ないですが、路上にはゴミがほとんどなく、町はいつもきれいです。

夏休み

日本の夏はブラジルよりとても暑いです。暑さと共に、夏休みがきました。待ち望んでいた時間でした。青春18切符を使い、電車で様々な地方を訪ねる旅に出ました。東京、横浜、広島、鳥取、岡山など、場所は違うけれど、人々の思いやりは同じでした。日本語が完璧ではない私にとっては、大学での勉強の成果を試すチャンスでもありました。また、7月にあった海外福岡県人会子弟招へい事業に参加して、海外福岡県人会から来た子どもたちや引率者のお世話をしました。この時は、ブラジルからの参加者と話していると、家に戻った感じがしました。みんなテンションが高くて、楽しかったです。

勉強

福岡では、国際医療福祉大学で後藤先生の指導のもとに勉強をしました。私を手助けしてくれる先生に出会えたことは、非常にラッキーでした。とても忙しいときでも、先生はいつも私の質問に答えてくれて、私と話すための時間を作ってくれました。後藤先生は、いつも私の体調も心配してくれたし、私の学びたいことを考えてくれていました。

また、先生のおかげで、学校から3つの病院に研修へ行き、理学療法と日本の医療システムを見ることができて本当に最高の経験でした。実習は一週間に一回しかありませんでしたが、素晴らしい経験がたくさんできました。一番良かった経験は、手術をするために入院していたブラジル人の患者と日本人の医師をつなぐ仕事でした。さらに、私が理学療法という仕事の中で一番大好きな小児科も経験できたと、研究ではMagnetoecephalographyという機械を使うチャンスがありました。

大学では、理学療法の授業のほかに、日本語の授業がありました。この大学には外国人が少なかったですが、先生、大学の事務スタッフ、研究生たち、学生たちはいつも私にとっても親切でした。

最後に

私を一番助けてくれたのは、光安夫妻（私が住んでいた寮の方）です。私が困った時は、いつでも私を助けてくれました。光安夫妻は私の日本のお父さんとお母さんになってくれました。

また、同じ期間を過ごした10人の県費留学生は、本当の家族のようでした。彼らとは、この留

学生活でとても大切な存在で、一緒に楽しい時間を過ごすことができたし、困った時に相談できる人がいつも側にいました。大切な友情で、彼らと一緒に素晴らしい日本を知ることができました。

福岡での留学中、福岡県、国際交流センター、福岡県海外移住家族会やブラジル福岡県人会には、大変お世話になりました。この1年でできた、たくさんの良い思い出を絶対忘れません。心から感謝しています。ブラジルに帰ったら、ブラジル福岡県人会や青年会の手伝いをし、今後県費留学を希望する人たちの手助けをしたいと思っています。素晴らしい経験をさせていただき、本当にありがとうございました。



国際医療福祉大学福岡リハビリテーション学部 教授 後藤 純信
(平山担当教員)

時の流れは早いもので、気付けば平山さんが当大学に留学して1年が過ぎます。彼女も、ようやく日本での生活に慣れ、定期的に臨床に接し、研究結果もまとめ、担当として満足しています。一方、手助けできなかった部分も多々あり、反省も込めこの1年の所感を下記します。

彼女の留学を初めて耳にしたのは、昨年(2012年)の1月頃でした。“ブラジルのPTで脳機能に興味を持っている女性”との情報しかなく、4月までは、①環境変化になじませるための方策、②彼女への指導方針、などを悩んでいました。

一般的に、留学生が、自分の目標達成のみを考えていたり、環境変化(言語の違いも含めて)になじまず精神的ショックを抱えたりすると、受け入れ側としては非常に気を遣います。その点、彼女は、明るく礼儀正しく聡明で、かつ日常生活に関する語学にも心配なさそうでした。留学で何か成果を残して帰国してほしいと考え、“注意の分散”を研究してもらうことにしました。

夏頃までは、日常生活や大学活動に慣れられず、かなり苦勞をしていたようです。この頃の彼女は非常に暗い顔をしていたので、心配になり面談したところ、語学的問題や臨床経験が浅くより臨床に興味を持っていることを知りました。そこで、当大学関連病院での実習を週1回行うことにしました。週1回の実習が楽しいようで、次第に快活になりました。10月には、“注意の分散”に関する研究結果の整理と論文の初稿を作成し、目に見える成果をあげました。これは、当然のこととして英論文として発表する、といったうれしい重責が、私にかかることになりましたが！

今回の受け入れを通じ、当初から彼女の意向を十分に把握していれば、さらなる成果や満足感を与えることができたのではないかと反省しています。最後に、この留学体験が彼女の楽しい思い出や経験の一コマとして心に残り、医療従事者としてさらなる成長を遂げられることを祈念しています。



ブラジル福岡県人会 樋口 ミシェル 優一

初めに

夢のような時間が終わってしまうなんて、寂しくて考えたくもないが、前へ進むしかありません。今まで、インターネットで見ていた世界を、自分の目で確かめることができました。それを言葉にして、伝えることは難しいですが、このレポートは自分の為だけではなく、読む人の為にも、気持ちを込めて書きます。

ブラジルの空港で、見送りに来た家族との別れの時に、全てが変わり始めました。憧れの国へ行く夢が現実となりました。飛行機の中での長い時間は辛かったけれど、その価値はありました。日本にやっとたどり着き、春の寒風を感じて、桜並木を見つめたときが、夢の始まりでした。学校が始まる前に、一緒にブラジルから来た友達と日本で出会った友達、皆同じ留学生として、いろいろなところを見て回ることにしました。生活に慣れる為には大切な時間でした。

春

学校が始まり、勉強に集中しました。ゲームプログラミングを学ぶ為に日本へ来て、その道で生活していくことだけを見ていました。ゲームクリエイターになり、日本で就職したいと思い、一生懸命でした。時には皆と一緒に出かけたりしていましたが、ゲームを最優先にしていました。しかし、後に勉強だけが留学の全てではないと気付かせてくれた友達には感謝しています。

子弟招へいプログラムが終わった頃、プログラムで出会った子どもたちの笑顔は忘れないながら、ゲームの企画書を考えていました。しかし、子どもたちのおかげで、自分も少しずつ変わり始めました。勉強や仕事が全てではないと気づき始めました。もしかすると、既に気づいていたのかもしれない。ただ、今まではゲームに夢中になり過ぎていました。夏休みの半分は、ゲーム制作に費やしました。頑張るのは良いが、頑張り過ぎるのは良くないということです。あの頃、自分は精神的に壊れそうになってしまいました。その時に支えてくれた友達はかけがえのない存在だということに気づき、近くにいる幸せのかけらを掴むことにしました。過去と未来に捕らわれずに、現在を生きることにしました。

夏

真夏の暑さの中で、新たな決心と共に歩き始めました。友達と一緒に青春18きっぷを買って、東京まで行きました。最初は大阪や京都で観光しました。一晩だけでは何もできなかったですが、目的地は東京だったので、あまり気にしなかったです。東京では二日間も観光して、行きたい所へ行き、会いたい人に会うことができました。しかし、私は、東京に住むことはできません。大都会のハイペースはストレスになると思いながら、旅を終えました。もう一度、日本を電車の窓から見ました。時間が掛かるけど、友達と一緒にだったから、楽しかったです。

学校生活に戻ってから、決心が揺らいできました。自分は何を目指しているとか、何をすべきなのか、頭の中が混乱してしまいました。交流センターにも、友達にも、学校にも、相談をしたけれど、なかなか整理ができませんでした。ここで、面倒をかけた人たちにお詫びをさせてください。「俺が馬鹿で、未熟でした。ごめんなさい。」今はもう心配ありません。心配ごとがあっても、今は頼れる人たちがいます。

秋から冬

もう一度、東京へ行くことになりました。今度は学校で、楽しみにしていた東京ゲームショーを見学するために行きました。再びゲームへの情熱を握り締めるために行きました。でも、違いました。情熱は戻ってきませんでした。けれど、確認したことがあります。ゲームが好きです。しかし、それを仕事にはできません。ゲーム作りは修羅場で、人生を賭けて進む道です。ゲームだけでなく、

エンターテインメントに関わる業界は同じです。ヒット作を作るかどうかの話です。とても不安定な道です。自分はもう、趣味でゲームと関わるだけにしよう決めました。

苦手な暑さは終わり、いい季節になりました。自分にとって、今年の秋は特別でした。夏休みに作り始めていたゲーム「月見ウサギ」が、月見の時期にはちょっと遅かったけれど完成しました。また、随分前にブラジルでやっていた太鼓や篠笛にも、日本で再び関わることができ、嬉しかったです。

あっという間に秋は冬になり、クリスマスのイルミネーションや正月の時期がきました。その中で、人生での初雪を見ました。

お礼

まずは県人会に感謝します。一生懸命勉強していた日本語に自信を持つことができ、また実践で使うことができ、とても感謝しています。新たな出会いと別れ、世の中には素敵な人がたくさんいると知り、また自分の未熟さに気付くことができ、たくさんの知識を得ることができました。この恩は自分なりに返していきます。次に来る留学生の役に立ちたいです。アドバイスや、自分が得た人生の知識も、後輩達に伝えていきたいです。このレポートはその第一歩にしたいです。

「例えどんな辛い時でも、死にたいと思った時でも、自分にとっての大切なものを見失わないで。すぐ側に自分を助けてくれる人はいるから、その時は素直に助けてと言って」



専門学校九州デザイナー学院ゲームクリエイター学科 松尾 龍太 (樋口担当教員)

ゲームクリエイター学科のデザイン専攻とプログラム専攻のカリキュラム内容は、全く異なりますが、最初の導入授業として5日間、両専攻とも背景メインの模写を描いてもらいました。プログラマは絵が描けなくても支障はないのですが、敢えて描かせています。デザイナーとプログラマは互いに考えていることを伝え理解を得ること、認識を共有することが重要であり、絵（デザイン）という道具が一番伝わりやすくどんな分野でも活用できるためです。さらに集中して模写を行うことで【観察力】を養うことができ、物事の全体をとらえる訓練になります。プログラムにおいては、全体の流れを理解していないと組むことはできません。

ゲーム学科は考えさせる教育を基本としています。ヒントは与えますが、とにかく試行錯誤しなさいという方針で授業を進めています。特にプログラムは論理の塊です。ひとつでも矛盾があれば結果が出力されません。

2週目からは、各専攻に分かれての授業となります。専攻ごとにリーダーを決め、プログラマは樋口君が挙手してくれました。1年間リーダーとして活動しました。プログラム講師から授業経過において、樋口くんの理解力は他の学生と比べても桁違いに良いと評価を受けています。これは、彼が論理的思考力の基礎を確実に身につけている証拠です。物事の理解や発想の手がかりとなる情報をインターネットや書籍などを活用し、的確にリサーチする能力は大変素晴らしいものがありました。また、リーダーとして他の学生の理解が遅れている場合、同級生のサポートもできています。

授業半ばの8月、9月頃には、デザイン専攻とプログラム専攻でチームを組みソーシャルゲームを企画し、プレゼン・講評を繰返しゲーム制作を遂行してもらいました。まだ入学して数ヶ月の為、クオリティーは乏しい部分もありましたが、実際のゲーム制作とほぼ同じ環境の中で、チームとして作品を作り上げたことが非常に重要です。

また授業を通して日本語も上達したと感じています。特に漢字の上達には、目を見張りました。これから進路への希望や少なからず不安はあると思いますが、焦らず一步一步着実に進んでいってほしいと思います。



ブラジル福岡県人会 中尾 カロリーネ きみえ

初めに

この1年間は、非常に素晴らしい1年でした。留学で日本へ来られたことで、初めての体験がたくさんできて、学んだことが非常に多かった1年でした。

ブラジル、サンパウロ市出身の私にとって、福岡は静かで、住みやすく安全なところで、サンパウロとは全く違う町ですが、新しい生活をしたからこそ、多くのことが勉強できたと思います。

景色と公用語だけではなく、福岡の文化や人々もサンパウロとは異なります。それでも、日系家庭で育った私は、日本の音楽やドラマが好きだったり、4年間日本語学校へ通っていたりしたことで、日本文化のことは結構知っていました。しかし、実際に日本で生活することは、知識とは異なる経験でした。毎日新しい物を発見したり、初めて行く場所へ行ったり、テレビでしか見られなかったことを体験したりして、ドラマの中にいるような感じがしました。

ブラジルや家族から長い間離れることは初めてでした。6か国から来た10人の留学生と一緒に暮らすことも、人生で初めての経験でした。みんな性格が違って、それぞれが今まで経験してきたことも、これからの目標も違いました。それは悪いことではなく、とても良いことでした。いろいろな世界と触れ合うと、自分の世界が広がることに気がつきました。なぜなら、他の人たちから自分が知らなかったことを学び、違う意見が理解できるようになるからです。この1年間、人間として成長したい気持ちが強くなったと思います。そして、家族として留学生10人が、お互いに話し合ったり、笑ったり、悩みも分かち合ったりしました。最初からずっと一緒にいたので、みんな、独りではないと思うことができました。

大学生活

もちろん、大学でも学んだことは数えられないくらいあります。九州産業大学は寮から近いし、留学生への対応に慣れているし、公共施設がたくさんあったので、このような立派な学校で勉強させてもらえて良かったと思います。私の指導教授の久保田優子先生も優しく、大学にいる間にたくさん勉強できるように手助けしてくれました。

授業では、日本語と日本文化の知識を深められたし、部活や友達からも、日本の習慣や日本人の考え方を楽しく習いました。大学生活は毎日楽しかったです。茶道を練習する機会もあったし、私の好きな言語も勉強できました。中国語とフランス語の授業は日本人と一緒にだったし、大学の留学生向けのイベントがあった時は参加して日本人学生と交流できました。その日本人学生と交流できたときは、とても嬉しくて、新しい感覚でした。国として日本を理解するためには、日本人の中に入らないといけないと思います。

茶道部に入ったことは、この1年間で一番良かったことだと言えます。留学のことを考えてみると、茶道の思い出がいっぱい頭に浮かびます。茶道サークルに入ってから、学んだことがとても増えました。茶道の礼儀や大切さはもちろん身に付いて、友達もできたし、「先輩」という言葉の意味を具体的に理解できました。部室の畳の色、先生の見つめていた目、たてられた抹茶の匂いは今でも頭にきちんと浮かびます。自分の一部を、確実に茶道部に残して帰国します。大学での生活ではないけれど、友人に誘われて太鼓も少し習うことができました。体験授業がとても気に入って、入ってしまいました。

最後に

このような素晴らしい人生経験ができたのは、支えてくれた人がたくさんいたからです。まずはブラジル福岡県人会からこの素晴らしいきっかけを頂いて、支援していただきました。ブラジル代表の一人として日本に到着して、福岡県国際交流センターの皆様と家族会の皆様はずっと1年間お世話になりました。感謝してもしきれないほどです。

皆さんは、私たちの留学が上手く行くように、いろいろな面から支えてくれたり相談にのってくれたりしました。特に家族会の皆様の活動によって、いろいろなところへ行くことができ、人生に一度の体験をたくさんすることができました。例えば、田植え、稲刈り、餅つきなど、ブラジルで経験する機会がほとんどないことばかり、体験できました。伝統的な着物も着ることができ、忘れられない思い出になりました。皆さんの優しさのおかげで、少しでも自分のルーツを楽しく知ることができました。

時間は驚くほど速く過ぎるものなので、大事にして行きたいと思います。この1年間の感謝の気持ちを込めて、今後私にできることをしていきたいです。帰国後は、日本で学んだことをブラジルで使っていくつもりです。そして、ブラジル福岡県人会で先輩と共に協力して、この留学制度が続くように支えたいと思います。

個人的にも、この人生経験をもとに自国で頑張り続けたいと思います。日本で四季を感じられて、とても感謝しています。出会った人、行った場所、経験できたことは一生忘れられません。この1年間の感謝の気持ちを伝えられたら嬉しいです。本当にありがとうございました。



九州産業大学国際文化学部 教授 久保田 優子
(中尾担当教員)

中尾さんは、前期には日本語初級A・C、キャリア実践演習C、中国語Ⅰ・Ⅱ、一般日本事情などの授業を履修した。後期は、日本語初級B・D、日本語中級D、フランス語Ⅱ、フランス語会話、英語学、中国語Ⅰ、ビジネス日本語、日本の文化などを履修した。出身国での職業であるジャーナリズムには、様々な外国語が必要であるとの認識から、日本留学においても外国語を学ぼうと努力してきている。授業への出席状況は、国際交流行事出席のためやむなく欠席した以外は、全授業に出席し大変良好である。また授業内容については、よく理解できたとのことであり、疑問点や不明点は、担当の教員にその都度質問をするなど、積極的かつ真面目に授業に取り組んでいる。また、日本語能力の向上をめざし、日本語能力試験も受験している。

一方、日本文化理解の面において、1年を通じて茶道を続けており、茶会にも出席している。さらに、相撲観戦や、国際交流行事には全て出席するなど熱心に取り組んできている。

帰国後は、留学前の職業であったジャーナリズムの道にもどり、日本留学経験をいかして、さらに他国への留学を考えているとのことであり、進路についての考えもしっかりしている。授業外では、国際交流行事や茶道を通じて、日本人や他国の人々とも積極的に交流を深め、多くの友人もできたとのことである。また、日本人学生の卒論のアンケート調査への協力も行った。

以上のような日本留学の1年間の中尾氏を指導した所感としては、日本語や日本文化、外国語を大変熱心に学び、かつ積極的にもものごとに取り組む姿勢は好感が持てる。日本語力も大いに高くなっている。また、将来の進路を見据え、日本留学を充実したものにしようとする姿勢は立派である。この留学により、日本文化をより深く理解し、今後も留学の成果を活かし、さらに発展、飛躍することが期待できる。



トメアスー福岡県人会 稲田 美穂 ナージア

はじめに

日本に来る前は、留学生生活が少し不安でした。しかし、福岡に住み始め、後悔は全くありません。あっという間に1年がたちました。福岡での生活はとても楽だと感じました。それは、ブラジルで五年間、寮で住んでいて一人暮らしに慣れていたのでです。そして、留学生の仲良い友だちができたし、兄も近くに住んでいたからです。

家族会と福岡県人会の皆さんのおかげで、多くの経験ができました。例えば、竹の子掘り、ぶどう狩り、田植え、稲刈り、もちつき、着物体験、花火、子弟招へいプログラムなど、新しく楽しい経験ばかりでした。

この1年間、私の人生でかけがえのない、そして大切なことがたくさんありました。その中には、長年会っていない親戚や、初めて会う親戚に会うことができ、すごく嬉しかったです。更に、自分自身のルーツについても知ることができ、不思議な感じがしました。祖父母が生まれ育った場所に行けたときは、すごく興奮しました。

他の留学生と一緒に、香椎駅近くの自協学舎寮に住んでいました。毎日のように食事を一緒にとったり、買い物したり、遊んだり、まるで、家族みたいでした。誰かの誕生日には一緒にお祝いをしていて、プレゼント交換もしました。それに、10人の留学生の中で誰か困っていた時には、皆が力を合わせて支えました。お互いの友情を強く感じ、沢山のいい思い出を一緒に作りました。

福岡には明るくて、親切な人たちが沢山いて助かりました。道に迷った時は、いつも親切に教えてもらいました。日本では、日本人、韓国人、中国人や他の国の留学生の友達がたくさんできました。10月に出会った日本人の友達とは、毎週日曜日に一緒に教会に通っていました。一緒に食事をしたり、話をしたり、とても親切でお姉さんのように私のことをかわいがってくれました。

私が住んでいたブラジルの町には四季がないので、福岡の四季を体験できて、とても良かったです。春には大好きな桜の花とさまざまな種類の花を見ました。夏の蒸し暑さの中、自転車で海に行き泳ぎ、くらげに刺されましたが、とても良かったです。秋には紅葉で景色がガラッと変わって、山でハイキングをした時に写真を撮るたくさん撮りました。冬には厳しい寒さを体感して、初めて雪を見た時はとても嬉しくて、寒さを忘れて遊びました。更に、季節によって、祭りや、着る服、花、食べ物、景色が変わる。日本人には当たり前なのかもしれないけれど、私にとっては、全部が初めてのことで、不思議でとても良かったです。

大学について

香椎から九州大学病院キャンパスまで自転車で通っていました。一週間に三、四回看護の授業を受けていました。リプロダクティブ・ヘルス、妊娠する前、妊婦、妊娠のあとのケア、そして妊娠による母親の体の変化と胎児の成長、それに、健康な妊娠、分娩、出産、育児、家族全体の健康のための勉強などを、1年生と3年生の看護学生たちと授業と演習を一緒に受けました。ブラジルで看護を勉強しましたが、日本と比べたときに、相違が多くありました。新しい知識は、勉強の道具や機械についてです。また、ブラジルと同じ知識については、再確認し、しっかり頭に入れました。加来先生は私の担当教授で、1週間に1度は先生を訪ねて、生活や勉強のことについて話をしました。安永あかりさんは、私のサポーター役をしてくれて、本当に助かりました。他の先生方にもたくさんのお話を教えていただきました。本当にありがとうございました。

日本語の勉強は、箱崎キャンパスで勉強をしました。会話力が上達したと感じました。これから、もっと日本語の勉強をしたいと思っています。

帰国後の目標

日本人の血が流れている、そしてブラジル人である私。それは、日本とブラジルの架け橋のような存在だと感じています。そのため、帰国後は、トメアスー福岡県人会に協力をしていきたいと思

っています。例えば、この県費留学制度のことをもっと伝えたいです。そして、多くの日系人たちに、日本、福岡の素晴らしさを伝えていきたいと思っています。

1年間で自分の中の目標がほとんど達成できました。それに、家族会、福岡県人会、福岡の皆さんのお陰で、この1年の間に、何度も幸せを感じることができました。良い思い出もたくさん増えました。言葉だけで伝えられないほど、感謝の気持ちで心がいっぱいです。お世話になりました。本当に心からありがとうございました！



九州大学大学院医学研究所保健学部門 教授 加来 恒壽
(稲田担当教員)

稲田美穂氏は、明朗闊達な性格で大変フレンドリーで周囲の皆さんと接して、明るく、深く付き合い、極めて良好な関係を築きました。我々の発達看護学講座（母性看護学、小児看護学、助産学）のスタッフ、保健学科の教員・学生、また地域の多くの方々とも親しく交流し、学問だけではなく、国際的意味でも文化面・生活面での交流も果した。

学問的にはブラジルの大学で看護学課程を修了し、九州大学医学部保健学科で産科学を更に学びたいとの希望があり、看護学専攻の講義を受講した。リプロダクティブヘルスの基礎理論として妊娠期の栄養、母乳育児支援、周産期の女性の心理とストレス、ジェンダー、ウイメンズヘルス、母子保健法を学び、学生のグループワークにも参加し自分の意見を発表した。また助産学概論・助産管理では妊娠による母体の変化と胎児の成長、出産前相談、妊娠の経過、分娩の経過などを受講した。演習では、妊婦・胎児の模型で分娩の流れを理解し、妊婦をリラックスさせるマッサージ、ストレッチなどの練習、そして胎児の模型での分娩介助や処置を経験した。さらに症状ケア技術では感染予防、ドレッシング法、薬物、注射の適応・手技についての講義・演習を受けた。また留学生に対する日本語講座も受講し日本語の能力の向上にも努め、精力的に勉学に励みました。

地域の人々とも積極的に交流し、花見（大濠公園）、竹の子堀、バーベキュー、蛍狩り、田植え、花火、サイクリング、ぶどう狩り、稲刈り、ハロウィーン、誕生会、着物体験など多くの行事に参加し、また東京、埼玉、長崎、久留米、北九州、山川などにも足を延ばし、多くの友人をつくり日本についての理解を深め、日本とブラジルの交流の輪を広げた。本人も「困ったことはありませんでした。どこかの場所を知らない時に、誰かに聞いたら、いつも親切に教えてもらいます。それがとても助かります。」と語っていました。



在ボリビア福岡県人会 川波 一幸

はじめに

はじめに、国際交流センターの皆さん、家族会の方々にお礼申し上げます。お陰様で、この日本で勉強ができてたくさんの良い思い出を作ることができました。その思い出の一つ一つは、忘れられないことばかりです。日本文化もたくさん知ることができてとても嬉しいです。これで少しは日本人らしくなれたと思います。

日本に来てから、いろいろなことを覚え、いろいろな人たちと出会い、多くの場所に行って美味しい食べ物もたくさん食べて、楽しいことばかりでした。その中で一番印象に残ったことは、日本人の優しさです。日本に着いてから何度も困ったことがありました。そんな時、みんながいつも親切に助けてくれました。電車に乗る時、道に迷った時、漢字が読めなくて困っている時、何度も助けてもらって、日本人の優しさを感じることができました。

勉強について

僕は、福岡県農業大学の寮に住んで、福岡県農業総合試験場で畜産の勉強をしました。寮の生活に慣れるのに時間がかかりましたが、一旦慣れると寮での生活がだんだんと楽しくなりました。試験場では、いろいろな場所で実習ができたことがすごく良かったと思います。乳牛から始め、豚、飼料チーム、肉牛、鶏など。畜産とはまた別に野菜コースでイチゴの研修も何度か行くことができました。実習の中で一番良かったことはイチゴの実習です。イチゴチームでは、イチゴの苗から作って、イチゴが取れる時期まで見てきたので、とても良い勉強になりました。僕の実家は養鶏をして卵を作っています。だからと言って僕は、当たり前のように鶏で実習を続けることにしました。でも、イチゴの方でお世話になった時に僕は、養鶏（鶏）の他にも僕が勉強したいことがあることに気づきました。イチゴは何年か前までは家で作っていたけれど、時間が経つとともにイチゴもだんだんと無くなって行ってしまいました。ですからボリビアに帰って、福岡県で食べたようなイチゴを作ることができるように頑張りたいと思っています。これで夢がまた一つ増えました。

日本での生活

日本で一番楽しかったことと言えば子弟招へい事業に参加できたことです。子弟招へい事業では、子どもたちといろいろな場所を見学したり、日本の小学生と交流をしたり、とても良かったです。海外の福岡県人会の子どもたちと一緒に、僕たちも良い勉強ができました。子どもたちとの思い出も忘れられません。

夏休みには海に行ったり、花火大会に行ったり、横浜にも行きました。海で泳ぐのは初めてだったのでとても楽しかったです。横浜では、姉の所にお世話になりました。姉たちとは、いろいろな所へ遊びに行きました。美味しい物もたくさん食べさせてもらって、とても楽しかったです。他にもボリビアの友達と会い、ボリビアの料理も食べました。冬休みも横浜に行きました。その時に僕が行きたかったスカイツリーに連れて行ってもらえたことが嬉しかったです。

その他にやりたい事が一つありました。それは、スキーです。スキーは生まれてからまだ一度もしたことがなく、冬休み中に一度行って見たかったけれど、行けなくてすごく残念でした。

最後に

帰国日のことで国際交流センターからメールがきた時は、“もうすぐだな”と思いながら、残りの時間を大切に、できるだけ多くの人たちと触れ合って楽しい思い出作りをしたいと思いました。思い出だけではなく、勉強の方も頑張っているだけ多くの物を身につけて帰国できれば良いと思いました。

2月末に最後のイチゴの研修がありました。その時は、懸命にイチゴのことを勉強して帰国して

から後悔しないように、いろいろな知識を得て帰国できました。

僕が今できること、今やらなければならない事を考えて、やって行きたいと思っています。日本に留学して福岡県の試験場で実習することができるようにしてくれた方々に、心からお礼申し上げます。日本で覚えたこと、いろいろな行事に参加できたことは、全て忘れません。僕と同じで海外の福岡県人会から留学に来た人たちと仲間になれたことは、僕にとって、すごく大事なことです。仲間がいることはとても大事なことだと感じる事ができました。仲間がいるという事は、すごく力強いことです。話を聞いてくれる人、相談に乗ってもらえる人がいること、何よりも大切な仲間に出会えたことに感謝しています。

最後にもう一度今までお世話になった方々にありがとうでは足りないけれど、お礼の言葉とさせていただきます。



福岡県農業総合試験場 家畜部長 山下 滋貴
(川波担当教員)

川波一幸くんは、シャイで漢字がちょっと苦手なごく普通の海外留学生です。

川波くんが研修先に選んだ、ここ福岡県農業総合試験場の家畜部の仕事は、とかく畜産分野の専門用語がたくさん出てきて、理解するのはとても難しかったと思います。

研修の前半は、乳牛・肉牛・豚・鶏・飼料作物・畜産環境・衛生などの各部門を少しずつ経験することになりました。それでも、全部を経験するのに7月ごろまでかかりましたね。いろいろなことを経験できたのではないかと思っています。その後、本人の希望で、鶏についての研修を重点的に行うことになりました。

何でも、川波くんのお父さんが鶏を飼っているとかで、一般的な鶏の飼養管理方法を学んだり、試験場で行っている試験研究のお手伝いもしてもらいました。川波くんは積極的にコミュニケーションをとる方ではありませんでしたが、作業はいたって真面目に取り組み、分からないことは質問をするなど真摯に取り組んでいました。

それから、今年に入って、ボリビアに帰ったらイチゴの栽培もしてみたいという申し出があり、急遽、追加で試験場の野菜部の担当者に講義をしてもらうなどしました。このような試験場での技術研修がボリビアに帰国後の川波くんの仕事に、少しでも役立ってもらえればと思っています。試験場のある筑紫野市吉木は山の中で、交通の便も悪く、一人で生活するのは大変きつい経験だったと思っています。でも、週末には同じ留学生仲間とも交流を深めていたようで、その点は安心しました。日本で知り合った留学生仲間たちとの縁は大切にしてもらいたいと思っています。

これからの川波くんの人生で、きっと手助けをしてくれると思いますよ。何にせよ、この一年間、よく辛抱して、頑張りましたね。研修お疲れ様でした。Adiós mi amigo.



コロンビア福岡県人会 小椋 恵子

はじめに

日本に来る前、私は別の国から来る留学生と一緒に住むことが分かっていたので、いろいろ問題もあるだろうと思っていました。日本に来て日本での生活が初めてだったので、私は落ち込むだろうとも思っていたし、福岡での生活は少し不安でした。しかし、福岡の町は安全でよく整備されていて、便利だし景色はとてもきれいで素敵な場所でした。また福岡の皆さんはすごく親切で優しい方々で、私はすぐに福岡県での生活に慣れることができました。

私が日本についた時は春でした。大濠公園へ花見に行き、桜の花を見ながらお弁当を食べました。そのチャンスを逃すまいと、できるだけ多くの写真に桜を収めました。なぜなら、来年の春が来る前にコロンビアに帰国することがわかっていたからです。

大学

国際交流センターのスタッフに、1年間お世話になる折尾愛真短期大学を案内していただきました。大学の担当者も紹介してもらいました。大学はクリスチャン系で、外国人の生徒が多かったことに驚きました。大学では日本語や英語、経済、貿易、マーケティングなどの授業を受けました。いろいろな授業を受けて、私は日本の経済状況についてのアイデアを得ることができました。また、さまざまな国から来たクラスメートとの会話の中で、日本語を学ぶことができました。授業はとてもにぎやかでした。担当者、クラスメート、図書館員、いろんな方々が親切に丁寧に教えてくれたので私はこの大学が大好きになりました。

いろいろなイベント

私たちは県庁へ、海老井悦子副知事にご挨拶に行きました。副知事とお話ができ非常に良かったです。

5月には私たち留学生は長崎へ行きました。長崎では原爆のことを奥深く知ることができました。その後みんなが楽しみにしていた子弟招へい事業が始まりました。そのプログラムでは友達がたくさんできて、子どもたちと楽しい時間が過ごせました。子どもたちと一緒にいろんな新しい場所に行き、手すき和紙の団扇も作りました。この事業で、小川洋県知事にもお会いし、感動しました。事業中に、子どもたちと遊んでいると、自分も子どもに戻ったような気持ちになりました。彼らが帰国した時は少し寂しくなりましたが、思い出をたくさん作り、写真もたくさん撮ったので良かったです。

夏休みには、私の人生で初めてこんなに暑い日々をすごしました。家族会のメンバーが、門司港や小倉に連れて行ってくれました。数日後、私たちは浴衣を買うために家族会の方が店まで連れて行ってくれました。その後、大濠公園と久留米の花火大会に行きました。予想していた以上に、久留米の花火が大濠公園の花火よりきれいでした。

ほかにもボランティア活動をしに八女市まで行きました。大雨のための土砂崩れで、店に入り込んでいた泥を外へ出す作業をしました。半日だけでしたが、私の祖父母が生まれた国のために、何か手伝いできたことが嬉しかったです。私たち県費留学生は、みんな夏休みに入っていたので、志賀島まで自転車で行きました。

私は、姉や親戚を訪ねて、千葉県成田市にも行きました。5年ほど私は彼らに会っていませんでしたので、私はとても興奮してしまいました。久しぶりに家族や親戚の方と話すことができました。成田市にいた期間は、約一ヶ月だったので、私は知り合いを訪ねて野田に行きました。また、秋葉原や渋谷、目黒に行き、東京スカイツリー、また、私が一番行きたかったハードロックカフェ上野店にも行くことができました。福岡に戻ってきた時は、私の第二の故郷に戻ったように感じました。姉たちとの生活に慣れてしまっていたからかもしれません。

そして秋には、稲刈りを経験しました。私は農家であった父方の祖父が、米を栽培して収穫の体験をした話を聞いたことがありました。祖父が話していたことを思い出しました。秋になると、私は海ノ中道近くの公園に行ってきました。公園は花が、様々な模様が描かれたラグのようでした。私は、紅葉を楽しみましたし、紅葉は最高のシーズンでした！

11月に初めて着物を着ることができて、とても興奮しました。大濠公園で茶道体験もできました。その日私はコロンビア人であること以上に、自分の中の日本人の部分を感じました。それは忘れられない一日でした。

そして、木の葉がだんだんと落ち始めたと同時に、寒い冬がやってきました。私は、家族と離れて初めて過ごす12月だったので、少し家族が恋しかったです。しかし、友人のおかげで、クリスマスと新年が素晴らしい時間となりました。新年は、友だちとカラオケに行き、初日の出もみました。

御礼

日本に留学できる、このような特別な機会に恵まれて、とても幸運でした。私の家族、コロンビア福岡県人会の坂本会長、志波さん、森光さん、古賀さん、倉富さん、私をサポートしてくれた全ての皆さんに感謝します。皆さんにサポートしていただき、あきらめずにうまく進むことができました。また、福岡県国際交流センターと家族会の皆さんにも感謝します。着物体験や、子弟招へい事業、田植え、稲刈りなど、忘れられない体験に参加する機会を与えてくれて、どうもありがとうございました。自協学舎の後藤夫妻にもとても感謝しています。いろいろなイベントを企画し、私たちを常に気にかけてくれてありがとうございました。大学の石松先生は、私のアドバイザーとなっただき、1年を通して私を手助けしてくれました。誠にありがとうございました。

コロンビア福岡県人会での私の使命は、福岡県人会に多くの人々が参加するように働きかけ、将来の県費留学生に対して、自分の経験について話をしていきたいと思っています。自分が日本で得たことを、県人会のために活かしていきたいです。

最後に、この偉大でユニークな留学経験を支えてくれた、同じ県費留学生に感謝したいと思います。彼らがいなければ、私はこんなに幸せではなかったと思います。私はあなたたちに会えたことを嬉しく思いますし、また遠くない将来、再び会えると思っています。皆さんどうもありがとう。



折尾愛真短期大学 教授 石松 建男
(小椋担当教員)

小椋恵子さんは温厚な性格で、勉強意欲が高い学生である。2012年4月から約11カ月にわたる研修を修了した。

本学での研修目的は自国で学んだ日本語能力のレベルアップと経済学分野に関する専門科目の修得である。研修は専門科目の講義を理解するための日本語力を保有していることを前提とし、また貿易論など本人の希望を取り入れた本学本科コースの科目を主体に設定し開始することとした。しかし、本学日本語能力検定試験による評価では、日本語能力が講義を理解する程には高くないこと、そして研修開始後に本人から専門科目の内容が理解できないところがあるとの相談があったためカリキュラムの見直しを行った。よって前期は本学に設置する日本語能力の修得を目的とする別科コースの日本語科目を主体に、それに加えて本科の専門科目を受講し、後期は当初の計画どおり本科の専門科目を主体に、それに加えて日本語教育を継続するカリキュラムを編成し研修を進めた。しかし、前期における日本語能力の向上が予定どおり進まず、後期も日本語教育主体の別科コースをベースとしたカリキュラムを再編成せざるをえなかった。結果として本人が希望したレベルまで到達できたかどうかについては、本人にとって多少の不満が残る内容ではなかったかと思う。

日本語により行われる専門科目の講義内容の理解に大変苦勞していたように感じ、また交流行事への参加や体調不良から、必要な15コマを継続して受講するということができなかったことが要因であろうと思う。しかし、受講した科目の先生の評価は大変高く、本学で学んだ内容は帰国後いろいろな場面で役に立つと確信している。持ち前の明るい性格と粘り強さでコロンビアと日本の友好のために活躍してほしいと願っている。



アルゼンチン福岡県人会 原田 ミカエラ

はじめに

この1年間は、人生で、最も実りのあった年と言っても良いと思っております。新しいことを知ること、自分の考えを広めることだと実感しました。心地よい故郷から離れ、地球でもっとも遠いところまで辿り着き、知らない国で、知らない人に囲まれ、自分のことや自分のルーツである日本をもっと知ることができて、すばらしい経験でした。

勉強のこと

勉強については、九州大学大学院の比較社会文化学府に入ることができて、とても興味深いことを学び、知能に溢れる方に巡り会えて、とてもすばらしかったです。現代世界は、国際化（グローバル化）の時代にあり、異なる文化伝統をもつ者が互いに理解を深め、共生してゆく契機となります。違うからこそお互いを豊かにしあうような関係を、どのようにして育ててゆくことができるのかを勉強することが比較社会文化学府の目的であるのです。なので、私は、日系人であってアルゼンチンの文化と親の日本文化に囲まれて育てられた現実があり、この学問を身近に感じておりました。そして、この学府で、国の文化の鏡になる諺をスペイン語、英語と日本語で比較しました。

福岡での生活

福岡での生活については、山ほどの経験を重ねてきました。まず、兄弟と呼ばれる友達との暮らしを少し書きます。今年の留学生たちとは一生切れることがない尊い絆が生まれたと思います。皆の性格がそれぞれ違って、ユニークで、いつか地球のどこかで又会えると信じております。この1年間、お互い支えあい、寂しい思いを減らし、暖かい家庭のような環境を作ることができたと思っております。

そして、福岡の人々は、心が広くていつも暖かい言葉を差し伸べてくれる人たちだと感じました。まず、国際交流センターの方はいつも優しい笑顔で迎えてくれました。仕事だとはいえ、その支えやいつも丁寧な説明に助かった時が何度もあります。家族会の皆さんたちのサポートにもものすごくありがたいです。会の名前のように家族みたいで、おかげさまで日本の文化をもっと身近に味わうことができました。福岡の伝統的な祭りや行事を見ることができて、私たちの中に流れている日本人の血が騒いだ時がよくありました。福岡の若者たちとも友達ができて、とても貴重な経験でした。言葉が通じて、通じてなくても、いつも一緒に笑ってくれて、昔からの友達のように暖かく仲間に入れてくれました。九州の方は心が広くて親切であるとは聞いていたのですが、実際にその優しさを感じる事ができて、嬉しかったです。

弓道

8年前、ブエノスアイレスで弓道を始めた私にとっては、この1年間は有益な年でした。日本の武道の一つである弓道を日本でやりたかったのです。想像以上の素敵な経験でした。福岡市の東区の東体育館の弓道場に入会し、次々とすばらしい方達に巡り会えました。教師七段、教師六段、錬師五段の先生方に習い、優しい先輩たちにアドバイスをもらったりしました。指導されているとき、日本人の独特な『優しい厳しさ』を理解することができ、西洋と東洋の教え方の異なる部分を比較することができました。その上、道場の皆様はとても親切にいただき、『母』『祖父』『叔母』『叔父』『姉』と呼んでも良い人たちと親しくしてきて、血が繋がってなくても強い絆が生まれることができること知りました。弓道のおかげで、いろいろな大会に参加したり、入賞したり昇段したり、新聞に出たり、福岡のいろいろな所（宇美、筑前町、黒田、志賀島）を訪れることができました。

帰国後のこと

帰国後は、若者たちにアルゼンチンの福岡県人会に参加してもらいたいです。残念ながら、若い人はあまり参加しない現実があり、時が過ぎるほど日本の文化にたいする興味が段々減って行く気がします。その上、日本語ができる人も少なくなっていると思います。日系人である私たちには、日本語ができることが、どんなに有益なのか注目させたいです。日本語と日本（特に福岡）の良さを知ってもらえれば、福岡県人会に若者がもっと来るようになると思います。

そして、ブラジルのように毎年必ずアルゼンチンから留学生が福岡に来るとは限らないので、最後に来た私は、できるだけ留學生活についてアドバイスをするつもりです。これをやるためには、アルゼンチン福岡県人会の Facebook のページを利用し、質問のやり取りがやりやすいようにしたいと思います。できれば、元留学生たちと一緒に青年部を作って、若者たちが気楽に相談できるグループになりたいと思います。また、国際的なイベントがある場合は、例え世界大会であり、どこかの福岡県人会の記念周年であり、できるだけ参加して協力したいと思います。

そして、留學中でできた友達、家族会の皆さんと国際交流センターの皆さんと再会することができたら、それは又嬉しい事でしょう。

皆様、この1年間本当にありがとうございました。



九州大学大学院比較社会文化学府 教授 志水 俊広
(原田担当教員)

原田ミカエラさんは、昨年（2012年）4月から九州大学大学院比較社会文化学府日本社会文化専攻の私の研究室の研究生となり勉学に励んでいます。ミカエラさんは、私の大学院の授業としては修士課程および博士課程の院生の合同ゼミと修士課程対象の「日本語教育学」に出席し、母語のスペイン語に加えて日本語と英語の能力を駆使して積極的に参加しています。さらに、ゼミのパーティーにも参加し、彼女の気さくで陽気な性格はみんなに好かれています。

ミカエラさんの強みは、先に書いたように、やはりスペイン語・英語・日本語と多言語を使えることですが、それに加えて、母国のアルゼンチンと祖先の日本の両方の文化に造詣が深いことです。その強みを十分に活かして、ゼミではスペイン語、英語、日本語のことわざについて発表しました。具体的には、スペイン語のことわざにおけるセルバンテス「ドンキホーテ」の影響と、英語のことわざにおけるシェークスピアの諸作品の影響について論じ、それらに対応する日本語のことわざと比較対照しました。言語や文化の違いがことわざにどのように反映され、ひいては発想にどのように影響しているのか、とても興味深い研究なので、今後もこのテーマの研究を続けてもらいたいと思っています。

このように、日本とアルゼンチン、および英語圏の言語・文化に精通しているミカエラさんは、日本とアルゼンチンの架け橋となるだけでなく、真の国際人として活躍してくれるものと期待しています。残り少ない福岡での滞在中に、できるだけ日本のこと、福岡のことを学んでアルゼンチンに帰国してください。そして、またいつの日か日本に戻ってきて、両国の関係強化に貢献してくれるものと期待しています。



ペルー福岡クラブ 田辺 グティエレス アルド

はじめに

まず、ペルー福岡クラブと福岡国際交流センターのおかげで、ペルーの平成24年県費留学生に選ばれて、心からありがたく感じています。福岡で勉強できたことは、素晴らしい体験になりました。

日本に着くと家族と友人がいない中、日本での移動や食べ物、生活に慣れるのには少し時間がかかりました。しかし、皆様の支援を受けて、人生で最高の年を過ごすことができ、とても嬉しいです。

私は、日本料理に早くなれました。日本料理はペルー料理よりカロリーが少ないので、日本でとても痩せました。僕にとって一番美味しい日本料理は、豚骨ラーメンとカレーライスとカツ丼です。帰国後は、絶対に日本料理が恋しくなると思います。

また、家族会の皆様のおかげで日本文化のことをたくさん学びました。福岡県の有名な場所に連れて行っていただき、面白いイベントに参加させていただきました。ホームステイや竹の子堀、田植えや稲刈り、夏の花火大会やぶどう狩りや餅つきなど、絶対に忘れられません。一番好きなイベントは着物体験でした。着物を着るのは子どもの頃からの夢だったので嬉しかったです。このような活動を通して、日本文化や祖先のことをたくさん知ることができました。

夏

僕は、日本の1年の中で、夏が一番好きでした。子弟招へい事業では、いろいろな国の日系人の子どもと一緒に、福岡と日本文化を習いながらたくさん笑って、楽しい時間を過ごしました。また、僕は子どもたちから人生で大切なことをたくさん学びました。また彼らに逢いたいですし、将来、ぜひ県費留学生になってほしいと思います。

夏休みには“青春18切符”で他の留学生たちと一緒に旅行しました。疲れる旅でしたが大冒険で、思い出をたくさん作ることができました。大阪、京都、横浜、東京までに行きました。東京で赤坂や秋葉原やスカイツリーや東京タワーや東京ドームに行き、僕の夢を叶えることができました。この4日間の旅で日本には、美しい風景や素晴らしい観光地がたくさんあると気づきました。

大学での研究

研究生として九州大学で勉強しました。僕のウェブプログラミングの知識を増やすために、芸術工学部でウェブデザインに関連する授業に出席しました。ウェブコンテンツのデザインのプロセスをもっと深く学びたかったです。担当の先生は、藤紀里子先生でした。毎週、藤研究室で他の研究生と一緒に各テーマについて話し合いました。僕の選んだ研究テーマは「アマチュア・ミュージシャン・交流を促すためのウェブサイトの作成」でした。授業は全部日本語なので、理解するのは難しかったです。たくさん自習もしました。

システムエンジニアとして、コンテンツデザインのプロセスは、僕にとっては経験がなくて、インスピレーションの連続的なソースを必要としたので、大変でした。途中であきらめそうになりましたが、藤先生からアドバイスをもらいました。デザインプロセスはスキルだけではなくて、他の人や物から、モチベーションやアイデアや刺激を受けなければならないと先生はおっしゃっていましたし、とても大切なアドバイスになりました。帰国するとプロとしてのモチベーションや自信について、改善していきたいと思います。

研究していたウェブシステムは、完成には日数が足りませんでした。ペルーで友達とこのアイデアを使って、本物のウェブアプリを作りたいと思います。今後は、ペルーで、習得した知識で効果的で高品質のシステムを作成することができます。チャンスがあればペルー福岡クラブのホームページを作成したいと思います。

御礼

福岡での生活で、自分に自信を持ち、個人的に成長したと思います。また、僕の福岡での保証人である吉永正義さんにとっても感謝したいです。お世話になりました。家族の一員のように扱ってくれました。

そして、2012年福岡県費留学生たちにも感謝したいです。彼らとは、10人の大切な家族になりました。1年間、嬉しいこと、悲しいこと、困ったことがある時を一緒に過ごして、友情の意味を知ることができました。誕生日を祝ったり、カラオケに行ったり、食事したり、初めて蛍と雪を見たり、日本の春夏秋冬を感じたり、子どものように遊んだり、相談したりしあいました。皆の優しさと無条件の愛を絶対に忘れません。みんなが大好きです。

皆様、最高の1年間をどうもありがとうございました。本当に幸せでした。また逢いましょう！



九州大学大学院芸術工学府 助教 藤 紀里子
(田辺担当教員)

アルド・グティエレス・タナベ氏は、平成24年度の1年間、芸術工学部画像設計学科の研究生として修学しました。非常に真面目で勤勉な学生で、これまで習得していたウェブプログラミング能力に加え、ウェブサイトの企画やデザインを学びトータルなウェブサイト開発ができる能力を身につけようと、様々な授業を熱心に受講しました。

ゼミにおいては、自らの体験をもとに、インターネットを介して演奏する仲間を見つけ、離れた場所においても共に演奏し楽曲を構築できる「オンライン・バンド演奏システム」WEBサイトを企画し、その制作に取り組みました。そのシステムの特徴は、既存のオンライン・セッションサイトとは逆に、同一時間に集合することが困難な多忙な演奏家たちが個々に時間を見つけながら演奏を録音し、個別にトラックとしてアップロードしたものを統合して再生でき、かつ、掲示板機能によりバンドメンバー間のコミュニケーションも促すようになっているところです。また、聴衆のコメントの書き込みや再生回数によるランキング提示機能などにより、バンドメンバーと聴衆の双方が一体となって楽しめるサイトになっています。

プログラムは順調に開発できたものの、これまであまり経験がないデザインにおいては苦心していた期間もありましたが、サイト構成からロゴマーク開発やナビゲーション設計などの詳細に至るまで、ユーザー中心デザインの観点から適切なインターフェースデザインを考案することができたと思います。

また、研究室の学生ともゼミや食事会を通して交流し、お互いの作品を見る事でうまく刺激し合い、お互いの文化への理解を深め合うことができました。

2月には、福岡のウェブ制作会社の訪問し、日本におけるウェブデザインの現場の様子を体感してもらいました。そして、日本での生活を満喫し、楽しい思い出をたくさん持って帰ってくれたことと思います。



南加福岡県人会 山本 ケリー 真由美

はじめに

福岡で過ごしたこの1年間は、夢に見ていた以上に素晴らしかったです。九州に住むことができ、東京や関西など新しい経験がたくさんできました。福岡の人たちは、とても思いやりがあり、大きな優しさで受け入れてくれました。町中には、たくさんのデパートやレストランがあり、とても便利です。博多や天神には、たくさんお店があって、とても便利です。天神から15分、20分も歩けば、大濠公園や埠頭にいきます。また、バスに乗れば15分でヤフードームにもいきます。このような都会にあって、20分以内で海に行くことができ、町の喧騒から逃れられるのは、私にとってとても贅沢なことでした。福岡で学んだことは、一人で本を読むだけではわからない知識がたくさんあります。

夏

夏は、友達と自転車で寮から志賀島まで4回以上行きました。とても暑かったので、何回もコンビニで休憩をしながら、志賀島までいきました。海も大好きで何回も行きました。また、みんなで見た海へ沈んで行く夕日は、とても素晴らしかったです。夏には、大濠公園と久留米の花火大会に行きました。1時間半もあり、人生で一番キレイな花火でした。久留米では、同時に2箇所の花火大会が行われていて、私が座っていた川沿いから、両方の花火を見ることができました。こんなにキレイな花火を、友達や家族会の方々と見ることは、忘れられないでしょう。

家族会の皆さまには、とても感謝しています。皆さんがいなければ、経験することが難しかったであろう機会を与えてくださいました。おかげで、私たちは、いろいろな体験をすることができました。また、皆さんは、私たちを本当の子どものように扱ってくれました。山の景色の久留米や海側の糸島、北九州へも一緒に行きました。全てを楽しめました。そして、日本の伝統的なイベントである、たけのこ掘り、田植えや稲刈り、車でお寺や神社にも連れて行ってもらいました。伝統的な博多祇園山笠の祭りも見ることができたし、お刺身や寿司、焼き牡蠣にも挑戦しました。

大学

私は毎日、大学に通いました。この一年間九州産業大学で勉強できたことはとても良い経験でした。担当教員のクリストファー・スピルマン先生は、いつも優しく、サポートしてくれました。前期に受けた、日本語中級、日本語初級、日本ビジネス、一般日本事情、日本文化の5つの授業の中でも、日本語中級が一番難しかったです。

日本語の授業では、思っていた以上に漢字と文法をたくさん学ぶことができました。また、日本ビジネスのクラスでは、先生が簡単な日本語いつも使ってくれました。この授業では、敬語の使い方を教えてもらいました。これは、社会に出たときに、とても役に立つと思います。敬語についての知識がなかったので、とても興味深い授業でした。わからないことがあると、辞書を引いたり、同じ大学へ通っていた中尾カロリーネさんが、いつも助けてくれたりしました。大学でできた日本の友達も、助けてくれました。

一般日本事情のクラスでは、名刺の交換の仕方や部屋、タクシーで目上の人が座る位置など、ビジネスにおいて役立つ知識を学びました。この授業は最初から最後まで、とても楽しかったです。大学では、役に立つ日本語や日本文化について、一生懸命勉強できました。そのほかにも、ポップカルチャーや、日本の食べ物、ファッション、アニメ、祭りについても勉強できました。日本文化のクラスでは、日本のおもな都市における伝統について学びました。各地の季節ごとの祭りや伝統の伝承、伝統的な食べ物などを研究しました。福岡で得た知識や経験は、ロサンゼルスへ戻ってからも、私の生活に新しい視野をもたらすことと思います。

御礼

帰国後は、南加福岡県人会の活動に積極的に参加したいと思います。新しい会員を増やすための活動をしたいです。

最後に、福岡県国際交流センターの皆さん、1年間、いろいろお世話になりました。本当にありがとうございました。すごく楽しい1年でした。私のルーツと日本文化を、とても身近に感じること画でき、1年間がすごく楽しくて言葉にできないほど、嬉しいです。自分自身、成長できた1年になりました。本当にありがとうございました！



九州産業大学国際文化学部 教授 クリストファー W.A.スピルマン
(山本担当教員)

山本ケリーさんは、昨年（平成24年）4月から、留学生として九州産業大学で日本語及び日本の文化を学びました。

具体的には、「日本語初級」（火曜日）という授業で、日本の文法（動詞の活用など）や漢字を学び、「日本の文化」（金曜日）では、日本文化を民俗学的な見地から勉強し、伽話や伝統的な物語、また日本の都市文化における祭りの伝統や祭りや暦との関係について習い、日本の食文化についても知識を身につけました。

山本さんはたいへん熱心な学生で、真面目に勉強に取り組み、4月から日本語がかなり上達しました。また同時に、日本の文化に関する知識も増えたと見受けられます。山本さんは性格が明るく、非常に外向的で、友人も多く作ったようです。

山本さんは、私の授業を取っていませんが、定期的に私に相談に来てくれました。その際、九州産業大学での勉強がスムーズに進んでいることを確認していました。そうしたことから、山本さんの九州産業大学での勉強の成果を、高く評価することができると思います。



サンフランシスコ福岡県人会 立花 操

はじめに

一期一会。振り返ると、この1年間はそうのようにしかまとめられません。長いような短い間に自分自身や人生に対しての考えが色々な方向に行きました。ものすごく嬉しかった日々、辛かった時、悔しかった時間、爽やかな気分の日、たくさんありました。今になって考えると、全ては今日の私を作ってくれたものです。四月から経験した事は一つずつ私の人生で一度しか起らない事なので、1つ1つにありがたみを感じます。私にとってはこれが日本で1年間留学からもらった一番大事な学びです。

福岡での生活

日本に来る前は、福岡での生活にあまり期待をしていませんでした。しかし、福岡の生活は私の母国より住みやすい事にまず驚きました。始めは食べ物の美味しさと、バスと電車の安全さにびっくりしました。人間の優しさも毎日、様々な所で感じました。寮暮らしでも留学生の楽しい笑い声が毎日聞こえて心に暖かさを与えてくれました。福岡では、天気の違い以外、日常生活ではきつい思いはしませんでした。しかし、アメリカにはまず無い季節の変化は非常に新鮮に感じた時も多かったです。ここはものすごく豊かな町であり、この留学生活では素晴らしい環境と人に恵まれていたと思います。

家族との絆もこの1年間のおかげで強くなりました。福岡に住んでいる両親の家族とは、予想以上に大切な時間が過ごせました。私は2歳の頃から親戚と離れて暮らしていたので、家族の歴史の話もいろいろ聞く事ができました。この留学のおかげで家族とのつながりも、より深まりました。

一生の友達もたくさんできました。県費留学生達に初めて出会った日の事は、よく覚えています。自協学舎で国際交流センターのスタッフとミーティングを行ったときは、みんなの顔に緊張感がはっきり出ていました。当然な事かもしれませんが、この1年間の中で母国と文化に関係なく留学生が私の一生の友達になれたのは、ここでしか出会えなかった仲間と、共に過ごせた事は、素晴らしい経験になったと思います。それ以外にも日本人の友達ができたので、また福岡に来るのを楽しみにしています。

大学

学校は九州大学の神経生理部で勉強する機会が与えられました。高密度脳波計を用いて、第二言語はどのように人間の脳でプロセスされるかを勉強し、英語と日本語でバイリンガルの人を被験者として実験を行いました。飛松省三教授と教室の先生達にこの1年間は本当に大変お世話になりました。私にとって初めての経験をさせていただきました。それ以外にも九大で日本語の授業を受けることができました。授業のおかげで日本語がだいぶ上達しました。

多くのイベントに参加

福岡に来てからアメリカで勉強していたお琴を続けることもできました。福岡で素晴らしい先生とも出会いました。お稽古を月に1、2度しながら寮でも練習しました。あと2年ほどしたら師範の試験を日本で受けたと思います。今年は演奏も福岡で2回見る事ができました。

7月6日から17日まで子弟招へいプログラムが行われました。福岡にルーツを持つ子どもたちが様々な国から来ました。子どもたちと楽しい時間が毎日過ごせました。私自身の事や福岡県の事もたくさん学ぶ事ができました。こういう交流プログラムはほとんどの子どもにとって初めてだったので、今後みんなの将来につながっていく重要な体験だったと思います。福岡とのつながりをもつ国際人として成長し、将来、福岡県とそれぞれの母国との架け橋になるためにも、若い人達同士

の楽しい交流はとても大切です。言語が違って笑顔や表現で実際に通い合えるということは現在と未来のグローバル社会には非常に貴重だと思います。子弟招へいプログラムで作った様々な思い出は一生残ります。

4月から家族会の方にも、ものすごくお世話になりました。久留米の家族会とホームステイや、ホテル体験、花火大会や、餅つきに行きました。久留米の花火大会では信じられないほどきれいな光景が見られました。北九州の家族会の方と門司港や、山口県や、わっしょい百万祭りに行きました。祭りは盛り上がり迫力がありました。そして最後は糸島の家族会の皆様と焼きカキを食べて千如寺大悲王院に行きました。私はカキが大好きなのでその日は幸せでした。そして、千如寺の2000年前から建っている観音像を見て感動しました。これ以外にも家族会の方とバーベキューや、田植え体験や、着物体験を楽しむことができました。八女市のボランティア活動にも参加しました。家族会の皆さんがいなければ、私たちも大分違う1年間を過ごしたと思います。皆様は私達留学生に対して家族のように暖かくしてくださいました。言葉で言えないほど感謝しています。

国際交流センターの皆様に対しては本当に感謝の気持ちしかありません。毎月行われている文化塾では様々な分野の専門家のお話を聞きました。色々、大事な人生の事や社会的な教を伝えてくださいました。福岡県から移住した方々の慰霊祭も行いました。3年に1度しかない貴重な体験に参加できました。福岡国際センターの皆様、この素晴らしいプログラムに参加させていただき本当にありがとうございました。

御礼

帰国後は福岡の事をできるだけ多くの人に伝えて、この1年で学んだ知識を広げていきたいと思っています。

まず、サンフランシスコの県人会の会員を増やすことが大切だと思います。これをするのには楽しいイベントや福岡の文化を統合するイベントをより多く増やして、人を集めることが大事になると思います。サンフランシスコの福岡県人会のイベント係を担当している私の両親と頑張ります。

そして、ソーシャルネットワーキングを利用して新しい会員を見つけて、母国と福岡のつながりを大切にしていきたいと思っています。人と人のつながりを使って、福岡だけではなくて日本に興味がある人に福岡の素晴らしさをこれから伝えていきたいです。

この1年の思い出は宝物になりました。今はずっと見つけられなかった自分自身のかけらをやっと見つけた気分です。一期一会の大切さを教えてくれた福岡の皆様から心から感謝を伝えたいです。



九州大学大学院医学研究院 教授 飛松 省三
(立花担当教員)

立花さんは、「認知脳科学」の勉強のため、当教室に1年間研究生として在籍した。立花さんは、日本語と英語のバイリンガルなので、研究テーマは、バイリンガルの脳機能を脳波で解析することにした。その理由は、日本人は漢字と仮名を使い分け、脳の中で漢字と仮名を処理する場所が違うことがよく知られているからである。

実験には、128チャンネルの高密度脳波計を用いた。英語を母語とし日本語を第2外国語とする学生(JSL)と、日本語を母語とし英語を第2外国語にする九大の学生(ESL)を研究対象として選んだ。視覚刺激は、4～6文字からなる英語とひらがな(小学校高学年～中学生程度)を用いた。英語を母語とする学生はひらがなの意味を理解し、日本語を母語とする学生は英語の意味を理解していた。刺激は顔や物体の写真も比較のために用いた。

文字を呈示するとN170成分(刺激を呈示して約170ミリ秒で文字中枢が活性)が出現するので、N170成分の潜時と振幅を解析の指標にした。どちらの群も数名程度の被験者の数なので、統計学的比較はできなかった。しかし、興味深いことは、JSLの方が英語および日本語に対して、N170の潜時が速く、振幅が高かったことである。ESLはひらがなを容易に読めるが、普段漢字として表記されている言葉を仮名にしたため、意味は分かるが、反応に時間を要した可能性がある。とても興味深い知見なので、他の院生に研究を引き継いでもらいたいと考えている。

立花さんは心理学の素養があるものの、脳波を使った脳機能計測は全く経験がなかった。一から新しい事を学びつつ、例えば視覚刺激の作成やその呈示法、脳波センサの装着、データ解析などを解析した。その意味で、彼女の真摯な姿勢が評価された。性格も明るく、当教室のスタッフや大学院生と協調しながら、研究を行った。短い1年ではあったと思うが、立花さんの今後の人生に役立つことを期待している。